

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

リモートフット

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 光昭, Murakami, Mitsuaki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/707

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



リ モ ー ノ フ ッ テ

村 上 光 昭

21世紀を迎えロシアでは、すっかり新たな姿を見せ始めている。ことの始まりはソ連崩壊後の安定期を迎えたプーチン大統領の新たなロシア史の構成であり、ロシアの正統性をソヴィエト革命以前のロシアに求めていることである。そのためには何よりも国威発揚である。この出発点が2003年聖ペテルブルグ開都300周年記念で、エビアンG 8直前に45カ国首脳を招待してこの式典挙行であった。さらに国際テロリスト撲滅で一致する米ロ協調であり、2004年の大統領選での圧勝とその就任式のきらびやかさであった。その影にはもはや健全なる野党など存在せず、政党なるものはすべて末梢的存在となり、クレムリンがすべてを主導する形を変えた実質的独裁体制である。しかしこれを帝國的民主主義なることばで纏めようとしているわけである。

さらに今年は独ソ戦・大祖国戦争勝利六〇周年という一大行事があり、それには対露平和条約のない我が国総理大臣も各国首脳と共に参加している。ソヴィエト亡き後のロシアで引きずるものをいかに国民的合意へとするかで常に腐心しなければならないのが大統領なのである。今年は日露戦争百周年、日露修好条約百五十年と記念すべきことは多々あるが、私たちにとってはまさに戦後六十年という歴史の節目で、すべてに新たな歴史を作り上げるという努力が至るところでなされているのである。そうあの反革命白軍将校デーニキンも10月3日に棺に収まり帰還したのだ。日露戦争と第一次世界大戦の英雄だ。これが国民和解の一步だ。そうだ正統帝国の伝統だ。

ソ連時代革命記念日が11月7日に祝われたが、エリツイン末期にその名称

を「合意と融和の日」と変えて、鎌と金槌を消した赤旗を掲げ、ソヴィエト国歌の歌詞を変えたロシア国歌を歌い祝われるようになった。これは連続か非連続かの混沌とした、不思議な連続であり、社会がどう折り合って生きているのか、きわめて興味深いことである。おそらく我が国の敗戦直後の社会の混乱を髣髴とさせるようなものであろうが、今は21世紀なのである。今年に至って、かの国の人々の三大祝日の一つ、十月革命記念日（戦勝記念日と正月休み）が今年限りとされ、新たな祝日を法改正によって11月4日に変更し、その根拠を歴史に求めたのである。これが暗黒の時代1612年のモスクワ解放記念日である。この日の名称を「国民統一の日」というのである。大統領がクレムリン前「麗し広場」のミーニンとポジャルスキイの記念碑に花を捧げて、「クレムリンは常にロシアの政治と心の中心です。クレムリンを奪取しようとするものが襲来し、全ロシア国家の存在が脅かされるときも中心なんです」。その傍らには、大学生や高校生が取り巻き大統領を語りかけるという用意周到なところがある。見事な新たな歴史の創造である。その後大統領は国民に語りかけ、「ロシアは昔より栄えあるお手本がありますが、これこそ人々に無私の奉仕をするということなのです。我が国民は常に団結しますが、それは平時においても、戦時においても同じです。相互扶助の伝統をもち、他人の痛みや欠乏を強く感じそれに答えるのです」とその精神の本質を述べたのである。愛国心を発揚し国史の再編成が着々と体制の中心から行われているのである。

ここで若者が登場するというのは、歴史を積み重ね未来を担うのが彼らであるからなのだ。当今はナーシスト「私たち」という政権を支える若者組織がつねにクレムリン主催の行事に参加するし、逆に、反政権グループ、いまやこれは末梢組織の左右様々な傾向の若者団体が現れる場にも、必ずと言っていいほど現れ、時には暴力沙汰まで起こすのである。2003年12月下院議会ドゥーマ選挙で「統一ロシア」が圧倒的に勝利を収め議会の三分の二を占めている。党首は下院議長でもあるグリズノフで、別にイデオロギーがあるわ

けではなく、翼賛政党といってよく、大統領・大統領府の決定をすべて実行する会派である。それ以外は議会に議席を持つのはロシア連邦共産党、祖国、自由民主党だけで、政治的影響力はほとんどない。しかもそのほかの政党は無数であるといつて良いほど、数は多いのである。このようにロシアの今日の政治状況では、高騰する石油価格と世界二の石油・天然ガス産出国としての外貨収入で、すべては順調であるが、問題は国内に抱えるイスラム問題と「国際テロリスト」ぐらいであろう。しかしそれが問題を大きくする可能性があるのは、ロシア連邦という国名が示すとおり、形を変えたソヴィエト問題が現在もあるということである。

さきに若者の運動体が政治場に現れていることは書いたが、その内実は、きわめて多様であり、識者やマスコミが多分に問題にする極端な政治信条を持つ団体やサブカルチャーグループなど多くあるのである。しかし政党として認められるには五万人の党員を確保しなければ、選挙中央委員会から認められず、政党という名を名乗ることも禁ぜられ、体制側から泡沫と規定されてしまうのである。これを厳密に当てはめると、ロシアには政党など存在しないとドゥーギンは述べている。そこでこの政党資格を得るために奔走し、現政権の行うことに明確に反対行動を取る団体の主導者が、ここで取り上げようとする、リモーノフである。本名エドアルド・ヴェンニアヴィッチ・サヴェンコで、いまはエドアルド・リモーノフである。

生年は1943年で、戦後60年を奇跡と思えるような生き方をしてきた、十歳まではスターリン下、中学生、青年期は雪解けフルシチョフ、停滞期ブレジネフのもとソ連市民で、米国への亡命者、フランス市民権を持ち、帰還者でソ連市民権回復者である。考えられないことが生じたのはペレストロイカによるものである。現在はロシア連邦市民ということになる。

彼をまじめに取り上げるのには賛否様々な意見があるだろう。私がここで彼を取り上げるのは、年齢とその活動場所の変遷と、才能豊かな詩人・作家・様々な職の遍歴者、さらにはブレジネフ体制下での異端児であり、米国・フ

ランス滞在十四年、さらにフランス市民権を獲得し、米国移住、ソ連国籍喪失後、1991年ペレストロイカ後のソ連末期にゴルバチョフによる彼のソ連国籍回復、それ以後彼の出没する場所は、内戦下のユーゴスラビア（そこでカラジッチと親交を結び、フランスや西欧から強烈な非難を浴びる）、ドニエステル共和国、クリミヤ、アブハジアというふうにソ連時代の影響力を少しでも保持しそうなところへ出かけて行き、軍事的、あるいは政治的活動をするのである。（ある人々に言わせれば、いつまでたってもくちばしの黄色い、大人になりきれぬ、老革命家ということになるのだろう）。これは彼の「死者たちの書」に克明に書かれている。その後2001年テロ事件、違法武装グループ組織、武器不法購入のかどで刑期4年の有罪判決を受け、レフォルトヴォ監獄に収容され、そこで本を書き、かつ7、8冊を出版。このロシア政府の有名作家に対する言いがかり的な判決にロシアペンクラブも釈放要請の声明も出している。2004年7月に模範囚ということで刑期前に釈放され、現在は党として認められるための活動を行っている。レフォルトヴォ監獄服役中に、ベレヂンスキイが彼の三部作「私たちは偉大な時代があった」「未成年サヴェンコ」「若いごろつき」と「詩集ルースコエ」を脚色・監督した映画「ルースコエ（＝ロシアというもの）」が制作された。昨年には彼が釈放と同時にラジオ局「マヤーク」のインタビュー番組に出演している（ラジオ放送局「マヤーク」2004年8月4日）。これを見ても聞いても我々は以前とは全く違う時代、情報が制限されながらも大量に流れている世界に住んでいるのである。「現代の英雄」とも揶揄される人物のことを彼の地に赴かずして、書くとは大変無謀である。それでも当地で情報を集めることができるようになったのは、なんという事態の変化であろうか。多弁な彼がはき出す情報は膨大で、かつリアルタイム、一ロシア語研究者が追い切れるものではないし、処理できる範囲を遙かに超えている。彼の書く小説は、本人が言うように、ジャンルの規定はできない。自伝小説、記録文学とでもいうのであろうか。彼の現在の関心は記録、ドキュメンタリーであるという。従って彼の書くす

すべての作品を克明に調べると、まさに一本の歴史時間を生きてきた本人の視点が見事に前進後退、場所移動も自在に可能な言語を使った見事なタペストリーが何枚も織り出されているという観を呈している。現在も盛んに動いているものなどどうすれば正しい姿など見えようか、そこをあえてある一面を探り出そうという試みである。しかし彼の小説家として書く文体は端的、明確、またある時には絵画的、グロテスク、さすが詩人である。その人がどうしてクレムリンに挑むのかというのは、彼の人生すべてを見なければ出てこない。その源はやはり戦勝直前のソヴィエトという国に生まれたということに他ならない。

これらのことから様々な作品と詩集を読んで、リモーノフ本人の考えの大本がどこにあるのかを調べることにしたのである。分かるはずもないが、彼の書き物と筆者のコラージュにしかならない。しかしこれはすべては子供時代の暮らしが土台である。その暮らしも良い暮らしをしたい、それがすべてであったのだ。インタビューでは彼は現在の信条は何か、と問われて、別に何もない、ただ監獄にいた時はここから出て行き、立ち上がろう、だけだった、といている。全ては自由。禁忌なし。

彼が最初に本を幸せにも出版できたのがフランスであり、「僕はエージチカだ」がフランス版タイトルは「ロシア詩人、大きいネグロを好む」(1976)である。(日本では沼野充義による北大スラブ研究所 HP にリモーノフの初期の紹介がある。) その後米国で出版されたのであるから、当時のソ連で公になるまではもっぱら、亡命ロシア人の、フランス語訳あるいは英語訳などで異質な才能豊かなロシア人として迎え入れられたようである。とにかく彼の行く先々で、人との関わりはきわめて濃厚で、希有な存在である。そんなことであるのかと思うことが、現にあり、それを生きてきたのがリモーノフなのである。おそらく日本で研究されないのは、現在あまりにも政治的「極左」活動をしていることと、その文体上の問題である。世界に散らばっていくロシア語話者の規範侵犯と PC を欠くような語彙や表現のせいである

うと思われる。この点については翻訳の問題としてのインテメートな関係を取り上げたイタリア語文学をロシア語に女性として携わることの困難さについて論もある。

語学を学ぶものが、同時代同世代の作家を読むなど夢にも思わなかったが、リモーノフを知ったのは週刊誌「新時代」(2001年2月18日 No.7)上で、ボスニアのカラジッチと黒めがね姿のリモーノフ写真入りの記事を読んだことだった。これはメーリホフによる、彼の新刊「死者たちの書」の書評記事「老革命家の覚え書き」だった。

現在の彼が政治を目指すという背景を知るには「私の政治履歴書」(2002)に克明に記述されている。ペレストロイカのおかげで、85年以降頻繁にパリからロシアを訪れることになり、政治に関わることになるのである。

祖国の反対側で74年から85年までの10年、西欧で暮らして、穏やかだった。つまり西欧では揺らぐことなく頑と支配していた保守主義。ロシアはがちがちに冷凍になっている。ロシアが冷凍であったということにはロシアのインテリと芸術家には明らかな不便であったと思っていた。しかしこの状況が肯定的に労働者や農民の運命に反映していたのだ。彼らは特権を受け、確かにこのことを認識していなかった。

実のところ私はロシアの変化を内部からなんて期待していなかった、全く政権に対する異端者たちの運動の影響は無視していた。政権が異端者の運動を見事に壊滅して、もっとも騒がしいものたちを外国へと追いやっていたと思っていた。

最初1989年はロシアは全く気に入らなかった、自分のものではなく、貧しい国で、ドイツとトルコを一つにしたようだった。誰も彼も外部世界を知らず、厚かましくも「みんなと同じように」、文明世界のように生かしてくれといい、自分の希望を即座に実現してくれというのである。

1989年からペレストロイカ反対の4本の彼の論文が「対談者」に現れはじめる。論文「マゾヒズムはソ連の国家政策でありまさにゴルバチョフの統治

のためだ」がロシアで特別な騒ぎとなり「私に対する最初の嫌悪の波が社会を駆けめぐった。1990年12月イズヴェスチヤ社をゴレムビオフスキイが手中にし、自分の庇護者エフィーモフが新聞人経営集団に選ばれ、定期的に論文を送った。ソヴィエトロシア社では喜んで印刷したが、リベラルなインテリたちはため息をついて嫌悪していた。自分が祖国の運命に参加した最初の気持ちはジャーナリストそのものであった」。

自分が同胞に説明したかったのは、彼らが愚かで、この愚かなことをストップさせねばならないということだった。ヨーロッパの安寧はだんだんと、百年かかったのだし、植民地を無慈悲にも奪略してのことだと。五百日計画などというのは全く非現実的である。……初めて説明したのは西欧においてみんなの知っている真実であり、清教徒の倫理であり、資本主義が初めて清教徒の国々で生まれたことである。

そんななかソ連崩壊、ロシア連邦の成立、議会とエリツイン大統領の対立、オスタンキノ襲撃事件、大統領選挙と歴史の現場参加者となったのである。そこでの活動は、やはり西欧の本当の姿を唯一明確に伝えた帰還者であったから、それなりの支持を手にしたのだろう。ジリノフスキイとも知り合い、アンピーロフとも知り合い、ジュガーノフとも知り合うのである。「しかし自分は1993年の6月末に、ゼロから新党を創らねばならないと思った。ゼロから、新しい全く政治的ではない人たちと共にである。こんな人が二人いた。哲学者アレクサンドル・ドゥーギンとトヴェリ大学法学部学生タラス・ラブコである」。

強力な仲間との邂逅といつもの分裂・ドゥーギンの賛否

ナツ・ボル党（NBP＝国家ポリシェビキ党）結成にあたり、1997年には哲学者アレクサンドル・ドゥーギンが熱い気持ちでリモーノフのことを論文「共産主義者リモーノフ」を書いている。97年8月26日No.34(195)
<http://imoerium.lenin.ru/~verbit/Limonov/kommu-limonov.html>
ここでのリモーノフに対する評価の根拠というのはなんだろうか。そ

これはインテリでない者が成功者として西欧から帰還してきたということである。ドゥーギンが対立者の集会でリモノフが演説するのを聞き、神話が実現したと思えたという。「人民が立ち上がる権利を持っているのは、統治者が人民を裏切る場合だ。人民が不服従の権利を持っているのは、信じ切った国家を権力が破壊する場合だ。人民が自由意志の権利を持つのは、誰も何も私たち、ロシアから私たちの精神、私たちの歴史を奪えないからだ……」とリモノフのしゃがれた声を聞いた時だ。一般の人が彼のハンチングをかぶりピーコートに寒そうにくるまる姿を見て、「奴は良いよな、作家でインテリ、世界に名をなす小説家だ。彼は立ち上がれと呼びかけているが、不意に外国へ行ってしまうよ」という。でもリモノフの声に、彼の言葉に、彼の姿になにかがあった。それこそ臆病な身分の高い反対者たちの聞こえてこぬぶつくさを退けるものだ。リモノフがしゃべるのは考えていることであり、彼と共に何千というロシアの虐げられ、つばを吐きかけられ、さげすまれた一度踏みにじられたロシア人の心をその広場で考えていたことだ。

官製ではない、全く正直な、きわめて誠実な声である。現に起こっていることへの関わりを理解できない拒む者の声である。まるで熱狂者が人民を見つめ、人民を見ている。戦友たちに握手し、友人たちを信じていた。傲慢なところが少しも見えず、熱意、様々な考え、感情で暮らしてきたまま叫び、できたように、望み通りに生きてきたのだ。

本当に自由な人の声。ロシア人の声。退却する人間がもちあわせる狡猾な逃げ道がなく、出し抜くことができない人。振る舞いが尋常でないのに開けっぴろげである。おそらくナイーブである、このような人は馬鹿か天才だけだ。

こう言ってドゥーギンはナツ・ボル党共同活動者になるが、その活動期間はとても短い。その離別について、リモノフは「私の政治履歴書」(2002)では「ドゥーギン？ 私の考えるところ、彼は我々がうまく行く

か行かないか待っていた、それも団結したいのだが、うまく行くのを見極めてからなのです。これは彼がことを操作する方法なのだ。後になってガイダー・ジェマールと知り合ってから、私たちうんとドゥーギンのことを、私たちの共通の戦友であったから、話したのだ。そして達した結論は、ドゥーギンがつねに先導者が必要で、彼自身は永久に導かれる者で、一人では機能しないのだ、ということであった」。

ということはどちらの性格が強いのか、主導権争いであるのか、あるいは純粋インテリ対西欧での成功者で帰還者との差異なのか。ドゥーギンがリモノフを褒めちぎった時には、リモノフのソヴィエトを離れて米国で最初の書き物が、ロシア人亡命者代表の全く異常なる立場であり、反サハロフ、反ソルジュエニーツインであったからだ。彼らが政治に関わると、ただ反ソヴィエト、反共産主義で右派リベラルで、主人を変えただけで、いつものおべっか使いで、お役に立ちますというものであった。リモノフが亡命生活の最初からこの一般的な雰囲気と根本的に対立していた。リモノフが非難したのは彼らの嘘、祖国への裏切りであった。こんな風を書くドゥーギンの愛国・共産体制支持の立場は明確に見える、当時は、リモノフにただただうっとりしていたのだ。

しかし2005年8月には kreml.org に「ナツ・ボル党は存在する権利なし、そのリーダーは吸血鬼だ」とインタビューで語っている。彼はリモノフと袂を分かってから「地政学専門家センター」を主宰、国際「ユーラシア運動」主宰である。

ナツ・ボル＝リモノフツイ（リモノフ郎党）はマスコミをにぎわしているが、これは娯楽ではないかな。社会現象としてナツ・ボル党はあるし、ナツ・ボル党の若者現象としてある。しかしナツ・ボル党の選挙の盛り上がりはないし、あることはないだろう。リモノフは概して、自分の人生の小説を書いている。私はこの小説の最初の数章、エーヂチカの若い頃の彷徨、が気に入っていた。また人間としてエドアルドはと

でもかわいい。彼がロシアに帰還した時、当初私も彼の愛国主義、反西
欧主義に、民族・愛国志向に連帯していた。でもだんだん分かったのは、
これは単に自分の小説なのだということです。冒険、経歴の美化ですね。
結局私は、この履歴が何か辟易とするものになり、すべてこれは面白く
なくなってしまったのです。……リモーノフの近年の暮らしはお笑いぐ
さですよ。投獄はお笑いぐさ、釈放もお笑いぐさですよ。ナツ・ボル党
にやってきた青年は私が大部分創った考えに集まり来たのです。リモー
ノフはそれを利用して、それを自分の小説や覚え書きに埋め尽くしたの
です。こんな若者たちはどこかで服役し、苦しみ、自分の運命が壊され
ているのです。これは醜い、これはナツ・ボル党指導部からのサディズ
ムですよ。

というのがあれほど賞賛された数年後の同じ人物の言である。

<http://www.kreml.org/inteview/95759133>

では誰が、リモーノフに賛同するのであろうか。リモーノフは弱者の支持
に向かうのである。それに若者が同調する。党旗は赤旗中央が白抜き円に
(ちょうど日の丸のあべこべ) 黒で旧ソ連国旗の鎌と金槌が描かれてある。
(党歌はショスタコーヴィッチの孫の手になるのだ。) それを持ってデモに参
加する。白、青、赤の三色旗に対する赤、白、黒の鎌に金槌は強烈だ。

「死者たちの書」序(2001)

自分が知っていた人、自分の暮らしに長い間、あるいは短期間共にい
た人たちへの呼びかけのようなものだ。

この本を書きたいとは言えない。「英雄の解剖」(1998)を書いてから
本は書きたくなかった。とにかく資金が必要なのだ。目的は言えない。

約束してくれた資金貸しが未だに実現していない。それゆえ死者たち
を働かせる羽目になったのだ。死者たちを見ても特別な感情は出てこな
いのです。死者たちの顔に私たちは常に自らを哀れに思い、自らの暮ら

しの事々を嘆き悲しみ、まさに私たちに向かってきた過酷な、自分と一緒に生まれてきた私たちの死の視線を恐れているのです。

私は自分自身のことは哀れだと思わない、勝手に自分の人生がもうあらゆる期待以上に成功したと思っているし、おまけにもう約束され、これから先に覗いているのがエキゾチックな、きわめて面白い続きなのです。

この「死者たちの書」には美しい人たち、怪物や幾人かの英雄がいる。ただ一つ彼らがいると言うだけでもうこの本は成功することになっているのです。出版人たちは満足だろうし、私に支払った資金を取り戻すだろう、そしてさらにお金をつくるのだ。

本書の中にあるのは個人の死者たちだけだ。

山ほどの濃淡様々な交流をした有名無名の死者たちが暖かく冷淡に記録される。容赦ない記述で、死者にむち打つ感を抱く向きには反吐がでる書き物であろう。しかし、これこそ濃厚なる感覚の固定であり消せぬ記憶・生の証だ。

時とともに死者たちの影響はだんだん弱まっていくものだ。明らかに死者はなく、誰も私たちをずっと紐に繋いでおくことなどできないし、自身に関心などもっていない。これに付け加える必要のあるのは、さらに死者が偉大であったかどうかはそのものを思い出す人の偉大さにかかっているということだ。私が、たとえば、そんなことはないのだけれど、詩人ブロッキイの郵便配達であって、十年立て続けに彼に手紙を配達していたとする、そしてのちに落ち着いて回想録を書いたとすると、それは、きっと、彼についてご立派にもご尊敬申し上げて回想していることになるのだろうかね。

投獄されていたにもかかわらず彼は多作であり、きっと特別便宜を受けているのだろう。でも名だたる歴史的レフォルトヴォ監獄収容者は一人40センチ平米で、こんな過酷なところはなく、ブロッキイの流刑地など保養地みた

いなもので、ワインに友人、カメラマンまでと毒づいている。

最近出版の詩集「ルースコエ」(2003)に見る最後の作品

嗚呼、詩というのはなんと端的、美しいのだろう。散文の克明さ、具体事実の強烈な列挙。いかなる苦勞も詩では美しく見える。散文にはその濃密さに押し潰されそうになる。でもそれを欠くとリモーノフにならない。

リモーノフが最終的にすばらしい暮らしを求めて、旧大陸から新大陸、ソヴィエト体制から資本主義の国、さらに元の危機の、瀕死の社会主義の国へ、市民権喪失から、新たな市民権と、元の市民権回復、といくつもの場に身を置くことになったが、そこには苦しいことばかりであったが、常にその横には美女がいたのだ。しかも今もいる。

詩を自分の愛人に書いていた
町をさまよい歩くはまるでずべこうだった
金持ち御殿で屋敷番になりたかった
そのとき胃の中はからからだった

ショウウインドウを眺めるのも尊敬の念で
両ポケットでげんこを握っていた
夢見ていたのは命を戦いでお仕舞いにしたいと
そしてなにかひたすら天から落ちてくる食いつなぎ

1976-82 ニュー・ヨークーパリ

それでも自己の中に裏側の英雄がつねにあった。彼には妻がいたし、妻との離別もあったし、新たな妻との巡り会いもあったし、再び離別というようなこともあった。これこそ規範から外れていたとしても、彼にとっては単なる事実。その心の内は長々と克明に彼が自伝的文学作品に書くこと自体、露悪的趣味の持ち主だとされないこともない。

僕の裏側の英雄は
常に僕と共にある

僕がビールを飲む—彼がビールを飲む
僕の住まいに彼は棲む

僕の女たちと寝ている
僕の黒いものが彼からぶら下がっている

僕の裏側の英雄は……
彼の艶めかしい背中は
今ニュー・ヨークで僕たちに見えますよ
どんなに暗い通りでも

1976-82ニュー・ヨーク—パリ

彼は美しいものより、本当のことのほうが好きだという。でもこと女性に関しては違うようである。美女しか知らない。その二番目の妻のパンクロック歌手ナターリア・メドヴェージェヴァは彼がレフォルトヴォ監獄収容中の2003年2月3日亡くなる。彼女は、1975年16歳で米国にあり、ファッションモデル、役者修業、ロス・アンジェルズでナイトクラブ、キャバレーで歌手、詩も書き、「ママ、私ペテン師が好きなの」という小説を書いている。彼女は1982年にリモノフと共にパリに現れる。ソヴィエトに戻ったのは1989年、ベルリンの壁崩壊の年である。完全な帰還者となったのは1994年で、彼女とリモノフはソヴィエト亡き後のロシアで政治的活動をするが、オルタナティブ文化の星だとされていた。2002年からはロック歌手と組んで、リモノフとの関係は形式上のものになっている。しかしおそらくはリモノフを内部から支える希望の星であったのだろう。監獄内でリモノフはナスチャに詩を捧げている。

ナスチャに

いつだか、期待しているよ、ごく近い年（うち）に
僕はちっちゃなパンクのところへ微笑みながらそっと行くよ

長い間僕たちは会わなかった、同志パンクよ、
行こうよ、散歩しようよ（反対じゃない？）動物園へ

そこは利口なペンギンたちに、それと猿顔の人たち
そこには美しいオオカミが歩いている、さながら赤いパルチザン

何か貴女は陽気じゃないね、同志パンク
ちょっとした散歩に連れて行かないかい、僕たちタンクをネ

そしてこの絶世の美女が顔に見事な品を作って
僕にこう言う、「監獄のオオカミ！ おお、とても私は貴男を愛しているのよ！
私はただ寡黙なの。私は全く悲しくないわ。
すべては極上で美しい！」—と僕に彼女が言ってくれるさ。

どこのプールで水飛沫をかけているの、アザラシが、河馬たちに
タンクに乗って僕たちは凍えきった隊列に進み行くぞ

僕たちが買えたのは四十パックのエスキモーのバニラアイス
羨ましくてみんな泣いてる、通り過ぎていくものたちが

近年の詩（2000—2003）より

監獄内で彼女の死の知らせを聞くりモーノフの心中は、いつもと代わらず
淡々としている。しかし出獄してから、またまた美女パートナーを見つけて
いる。ここまでに至る名声成功を得ることができたのは、フランスの文化事
情であろうし、彼の交友関係にはつねに美貌の女・連れ合いがいたのである。
しかし肝心なところではその記述は少なくなって、自分中心である。

パリでのインタビュー。フランス人の描くりモーノフ。

彼自身がフランス語から翻訳。

「死者たちの書」「マチュ・ガレイとナタリ・サロット」より。

「エクスプレス」誌の今は亡き評論家マチュ・ガレイの1984年の「日記」

で彼に数ページ割かれている。友人がこのコピーを送ってくれた、と「死者たちの書」の一章を割き「仏人が書いた」伝記を書いている。この時彼はパリでの出版の機会を得て、ニューヨークからフランスへ移って2年目の41歳だった。当時のフランス語力は酷いとある。しかし後にフランス滞在でものになったのだろう。

彼が私のところに訪ねたことをかなり広範に書いている。当時の住まいはパリのエコフェ通りだった。最近このコピーにたまたま行き当たり、独特の挨拶をあの手からもらった、このテキストを訳してみる。

「パリ、8月13日。

リモーフ。彼の本出版後に私は汚いヒッピーに会うのを期待していた、いや、中年男と歳を取った学生との何か中間のやつだ。シュルプリーズだ。まず建物から、エコフェ通りの家から、ここは何らあの哀れなニューヨークのホテルとは共通のものがないのだ、それを彼は自分の本数冊に描いている。美しい18世紀の館がゲッターに建て変わっていた。飾り気がなく、汚れのない階段と小さなアパート、主人の家具がとんでもないのに気持ちがいいのだ。彼は40歳、しかし姿形は若い、とても「整った」、(つまり現代的な、*de plus branches* という表現が用いられている)スタイルで、髪型は50年代、ジャケットは肩当てが入っている、袖は上腕までまくり上げ、Tシャツ、黒ズボン、先のとがった靴。「のみ市」の優雅さ加減はとてもよい。細い顔、すべすべした肌、少年のようなえくぼにめがね。どちらかというときっちりとしたプロフェッサーで、マージナルな亡命者ではない。そしてすべてのものがきっちり部屋に収まっている、でも日常用品も置いてあるのだけれどもね。彼自身やはり気持ちよく、ほほえみはとても美しいが、恐ろしい訛りで、相手にはなれない。彼は喜んで自分のこと自分の書物について話してくれる——大風呂敷ではなく、装った謙虚さもない。自分の放浪生活をきちんと始末し、また私もやはり直ちに自分の、私が彼の百万長者の立場であればのこと

だが、書生に雇いたいぐらいのタイプだ。概して彼はいつもきちんとしていて、普通というものからはかけ離れているのだ。このランボーはきちんとしたところがないというのではなく、毎朝5時間働き、さながら歯車のようなものである。自立しているのは、十五歳の時大佐のパパのもとから去って以来である。そういうことから彼が軍人や独裁者さえをも好きになるなど問題ないのだ。カダフィが彼を魅了するのだ。

何らの猛々しさも彼にはない、ただ独立していたい、これがすべてだ。正にこういうことよって彼はそこで少しの間プロの「泥棒」であったのだ、それから「仕立屋」(裏口で、非公式に)となった。そうしてひっそりとモスクワでビジネスをしていた。KGBが彼に興味を持ったものだから、持っていなければ、それはあまりにも多くの外国人と付き合いがあったからであるが、彼はきっと今日のDシステム(闇経済)王となっていたはずだ。しかし彼は間諜になることを望まなかった、そしてソヴィエト社会主義連邦を捨てる可能性が現れたときに、この反社会的なタイプの男がこの可能性を悪くというよりむしろうまくやらかした。自分の気持ちではソヴィエトの歯車たちが気を配ってくれることに有り難いと思っている。

(ジャン・ジャック) ポーヴェル(筆者注: ジョルジュ・バタイユ, アンドレイ・ブレトン, サド侯爵, O嬢の物語などの出版社)により見いだされる。つねに彼をヘンリー・ミラーと人は比較するものだから、そのせいで彼は幾分いらだっている。彼は(ニューヨークで)皿洗いをここにくる最後までして、召使いから一躍作家になったのである。ジノビエフではないし、ソルジェニーツインでもなく、しかも万人に悪く見られているのだ。

デビュー(始まり)
私は近日中に伝染病(=AIDS)で死ぬ、きわめて高貴な病(仏・AIDA)で

あるから、その名字(アイダ)ももち、貴族の要素もあるのだ。終わり。」
デビューは僕のデビュー、始まり。終わりは彼の終わり。死。

「死者たちの書」

つまりリモノフはこの「死者たちの書」を書いた段階ではフランス語をもロシア語に訳し、この評論家ガレイが自分リモノフに好意的であり、彼への見方は自分自身の考えと同じく、そう、肯定的な人間、だと思っているのだ。リモノフは確かにこの二十五年(69年二十四歳から四十九歳まで)きちんとしてきたと述べている。

「エージチカ」を出版する苦勞、いやソ連を後にした何もない普通の青年が、ニューヨークでどのようにしていけばいいのだろう。信じるものは自分しかないとき、彼が子供時代以来自らの力で、生き抜いてきた行き方しかない。ただ働くことである。

仏人がそう言うなら、自分はこうかな、と自分の詩を書く。

誰かこうリモノフのような

ベルベットのブラウンのジャケット
色くっきりフランス風のハンチング
二枚の丸ガラス(彼は眼鏡をかけている)
ズボンは水兵仕様で縫いは頑丈

きっとアラビアで勤めたのだ
チリ国境を越えた後
またベイルートで弾を受けた
でもこの弾傷は治してもらった

どこか中間あたりにパリがあった
そしてニュー・ヨークはこの前だ。そしてローマで

彼が真ん中で眺めたのはテベレの上澄みみたいな奴ら
しかし服は取り替えていた。化粧までもしてな。

嗚呼神様！どこへ逃げていっても
弾は受けねば。撃て。戦え。
国内で私たちが苛むのは仲間のチイナ
そして黄色い目つきで笑ってる

「もし今回行き着けなければ
すべてをなげうち、暮らし始めるぞ、普通の人だから
ほんとに何もない女の子を娶るぞ
ご馳走になろうとしているのは老人
かるうじて互いの胸がちゃんと感じたいから」

1976-82ニュー・ヨークーパリより

自分自身

私はきわめて直感的に人のことを感じるのです。私のまず第一の基本
は瞬間的本能です。私の前にいるのは、危険な人間あるいは危険ではな
い人間いずれかなのだ。

そこで彼が詩集の第一ページを飾る処女作と言っていい作品を見てみると、
正に彼の目は全体からズームインしていく目線であるというマニフェストの
ようなものである。ぎょっとさせる風景である。さらに、その初期から死者
に対するこちら側の人間が、そのことで自ら死に至らされてしまう過酷な運
命を受ける人間を示している。

全く人気のない庭で
誰かが食べようとしている
財布の中から何かのご馳走

その半分は生きている
(老人の半分は生きている)

でも半分は死んでいる
そして老人が食べ始める

彼は口の中へ飲み込むぞ
歯茎で噛んでいる
なにかまるで凝乳のよう
なにかちっちゃな凝乳のようだ。

肖像画

狐毛帽子をかぶった申し分ない敵の
でも大きな目と肩の上へと
毎日通ってくるは老婆
孫の肖像画へ近づいてくる

……私の孫やいーお前は絵だよ
私はお前が好きなのも老いているから
どうして死んでしまったものたちを好きにならぬ
私がお前を好きなのも哀れだからだよ

孫よ、お前にいつも私はつばを吐きかけてやるぞ
嗚呼 死人は私の血も涙もない孫
お前はごろりと横になっているのに私を引っ張る
両目でじろりとな……」

こんな具合に老婆が咎める
そしていつも慟哭する
肖像画を両手で殴るところは両の頬だ
あるいは棒きれで殴るところは額だ

ただいつの間にか疲れ果ててしまった
そして肖像の脇あたりへ倒れ込んだ
そして老婆の心臓が止まるや

孫は笑って肖像画からのぞき込んだぞ

彼の言ったは「なあ、いわんこちゃんいだらう！」

クロポトキンと他の詩作（1967-1968）

サヴェンコがリモノフという名をもらう。

彼の筆名は、リモノフという、この名字はロシアに多くあるのか、少ないのか、それは分かりかねる。しかしファスマーによるとレモンの項に、「一般的には新ギリシャ語あるいはイタリア語から直接借用されている。名字としては1490年にはこの名字リモノフが現れている」との記述がある。しかし、これではただ単なる名字であって、いっこうに興味を引くものではない。彼はその大部分の自伝的小説でその種明かしをしているが、ただ単に友人が名前を付けてくれたのだ、と書いている。

しかし彼は eXile への英文での投稿で（これはアメリカでの生活で身につけた英語を忘れないようにとその編集主宰者に修正せずそのまま掲載してくれと述べている）で、ペンネームの考察をするわけである。このあたりは厳密かどうか、知るよしもないが、ロシア人のペンネームは少ないのだ、それは由緒正しい貴族、上流階級出身者が物書きになったから、ペンネームなど必要がなかったのだ。それに対してフランス人はきわめてペンネームが多いのだと。それは本名がすべて有意味語から成立し、その名を聴けばすべて推察されてしまうおそれを免れるために、出自を隠すために、ペンネームを使うとある。それがジョルジュ・サンドであり、セリーヌだという。彼らは筆名で性を変え、自ら望ましいとする姿に名を変えたわけである。

この十月五日付「サヴェンコとサヴェンド」では、「貧しい私がペンネームを選んだのは自分の名字サヴェンコに絶望したからである。若干二十二歳から私はペンネーム、リモノフを使っている。このペンネームを私にくれたのは私の文学友達で若い田舎の詩人たちである。私たちは文学ゲームに興じ、参加者全員に人工的、奇妙な音の名前を付けたの

である。皮肉なことに、後に知ったのだが、私の名字サヴェンコは正教会の聖サヴァの名からなのだ。サヴァはヘブライ語からの翻訳で「賢明なる男」である。だから賢明である代わりに、私はリモノフ、ライムで、レモンなのだ。でももう遅すぎてどうしようもないのである」(The eXile #233 07,Oct, 05 http://www.exile.ru/2005-October-07/savenko_and_savendo.html)。

そんな風に言うが、彼には原風景としての戦後状況こそが彼の核心にあると考えた方がよいだろう。そう考えるヒントにヴィソーツキイの詩がある。長編詩「子供時代のバラード」と題するヴィソーツキイの断片に現れる終戦直後の様子。

カムフラージュをぼくは爆破しようと思ったんだ：／捕虜たちは追い立てられている—なんでいったいぼくたちは震えているのか?!／僕らの親父たちが、兄弟たちが戻ってきた／家々へ—自分の家へ、見知らぬ家へ……

ジーナ叔母さんのブラウスは／唐草模様に蛇だらけ／またポーポフ・ヴォーフチクの／親父が戦利品土産に帰ってきた。／

日本土産だ、／ドイツ土産だ……／かさらいの国がもどってきた、／トランクだらけ。／

親父から駄でもらったんだ／肩章を、まるでおもちゃのように、このぼくが、—／それから疎開から／群れをなして女子供が押し寄せた。／

彼らは周りを見回し、烙印をおしまわし、／迎え酒—それからしらふになった。／そして待ちおおせたものが泣くことひとしきり、／待ちおおせなかったものは—わめくことひとしきり。／

ヴィソーツキイは1938年生まれであるから、こんな記憶があるのかもしれない。彼より五歳若い幼子エーヂカにそんな記憶があるのは不思議だが、戦利品はやはり広範に行き渡っていたのだろう。暗澹たる気持ちになってしま

う。それが戦争だからと済まされそうにもないのだが。

「私たちには偉大な時代があった」では「家族のモード」の章。

がらくた市でもものが所狭しと売られていたが、その中でポータブル蓄音機が戦利品のフォクスロットの音楽を雑音だらけでうなっていた。そこへ父ヴェニアミンの息子は再三父とあるいは一人で出かけていった。母親も押し合いへし合いの「戦利品のがらくた」—あらゆる歳の男女用衣服に、スーツ、外套—を買いに行っている。兵士たちが征服したドイツから背囊に入れて持ち帰ったのだ。着てヨレヨレになった「戦利品のがらくた」は後に糸が抜かれて、何十万というモスクワから雪のシベリア、タジクの山々までの無名の人民仕立屋の規格となった。がらくた市で父親が予備にとっておいた将校長靴を売ることもできたし、息子エーデイの服を買ってやることもできたが、この服はつい先ほどまでドイツ少年の服だった。リモノフは服のなくなったドイツの少年に何らの涙をもよおす気持ちなどない、当時ロシア人民にはそんな気持ちは全くなかった、と書いている。労働者とハリコフの彼方の埃っぽい野原の農民が不思議そうに口をあぐりさせられる、ロシアのがらくた市に「戦利品の衣服」が出現しても、それは正しいのだ。ただドイツ少年の父親がかなりの我が国兵士をあの手で送り込んだと考えたり、思い出すだけで良いのだ。ドイツの戦死者は我が国に比べ四分の一。両民族に裁きの神様が野蛮だあるいは見事だと言えよ。ロシア人は決してもっとも酷いのではない。ドイツ女性の金時計を如何ですか、という手のない人になんと言えますか、しかも残った片手にそんな時計をいくつも着けているのだがね？

そこでこの戦利品の記憶と、友人のゲンカ・偉大者がヴィソーツキイの歌が好きであったと「若きならず者」の後書きで書いている。このゲンカこそがハリコフの片隅でサークルSSを創って活動した。そこでエーデイにリモノフという名を付けたのである。先のヴィソーツキイの一節に「親父が戦利

品土産に帰ってきた。／日本土産だ、／ドイツ土産だ……／かつさらいの国がもどってきた、／トランクだらけ。／」とあるが、ここのかつさらいの国こそ Strana limoniji なのである。リモノフは一度たりともリモノチ limonit', リモノニヤ limonija という言葉を使わないし、自分が友人からもらったペンネームを変えようとはしない。一度そうと決めたら、変えないのがリモノフなのだ。NBP—党名だって、党旗も、党歌もだ。

ニューヨークでの羨望と優越感、ブロッキイとの関わり。

アメリカで1975年にブロッキイは以前よりぐっと人間らしくなったのだ。説明するのは、まあ、簡単だ。彼が自分をどんなにアインシュタインのような人間に振る舞おうと、一超人に振る舞おうと、彼には付き合いがなかったのだ、アメリカ人たちが彼のためロシア人に成り代わることができなかった。それから、私とは違って、彼には文学上の付き合いが必要だったのだ。私が付き合いができる人はどこの誰か分からない、一酒屋の売り子たちとも、肉体労働者とたちとも、盗人たちとも誰とでも良いのだ、一私は文学的ではないのだ。いや、彼が必要なのは、レインの類、ヴァイルの類、ローセフの類だ。でも彼らはまだやって来ていなかったのだ。スヴィータは来るのが延び延びになっていたのだ。

私は言い忘れていたが、「僕、エーディチカです」の原稿は彼には気に入らなかったのです。これはそれを僕から受け取ったのは、あるいは1976年の十一月十二月か、あるいは1977年だった。僕に原稿を渡しながら、彼はほそほそとこう言ったのだ。

「あのね、老いぼれよ、君は遅かったんだよ。あっちの奴らがこんなことをもう書いているんだ……あっちの奴らはこんなことじゃなくできるんだ……」彼の語彙は60年代のものでピーター（＝ペテルブルグ）の格好つけた、きつとね。彼のところから原稿を持って帰る道中、私は毒々しくこの彼の約める

ような「あっちの奴ら……」を茶化してやった。私は知っていたが、「あっちの奴ら」はこんなものを書けなかったし、書けやしない、僕だけがこんなものを書けるんだ、と言って詩「羨望」を書いたのだった。

1978夏

夜ごと僕はお茶を飲む
中国茶の品書きを吸い込んで
自分の愚行を考えて
狭い密かな世界を訪ねてる

僕は有頂天になるほど一人きり
そしてもしも何かに胸を轟かせたときには
するとこれをこの本がしまい込んだのだ

たまたま散歩しよう決めてから
僕はグレイシイ公園を散歩していたんだ、用もなく
子供たちをそこで見つめているのも小胆に
夢想するのは彼らとちょっとだけ遊びたいの

六十年代のモスクワへという思いの実現。彼の創作活動を鼓舞しモスクワへ靡かせた人物はブルシロフスキイ。スモギスト、「天才たちのもっとも若い会！」会員。でも僕は彼らには負けないぞ。

スモギストの第一報をハリコフへもたらしたのはブルシロフスキイで、1966年の、夏のことだった。1965年の一月から私はアンナのところのテヴェレフに棲んでいた、そしてモスクワ移住計画を立てていた。

ブルシロフスキイはもう長年モスクワ暮らしだった。彼は普通の娘ガーリヤと結婚し、住民登録し、モスクワ・アヴァンギャルド運動のもっとも活発な参加者となった。彼は「知は力なり」誌の画家となり、作業所をもらい、外国人に絵を売り、成功者。近年彼のことは忘れられているが、他のアヴァンギャルドたちも来ていた。現存の古典家となったイリ

ヤ・カバコフと死んだ古典家ズヴェレフだ。

ブルシロフスキイがうっとりしきって私たちに褒めちぎっていたのは、天才レオニード・グバノフ、彼の詩の読み方である。ではレオニード・グバノフの1964年の詩（きっとこれなら後の誤解が解ける17歳の詩だ）。

レオニード・グバノフ

祈り

私の星よ、隠すな、隠すな、
私の星よー僕たち楽しくしています。
私の星よ、ダメだ、ダメだ
山ほど飲んだり銃自殺するなんて。

すごく良いなあ、僕たちが二人って
すごく良いなあ、僕たちが背をかがめるって
神様の前でね、ツアーリの前じゃないよ
すごく良いなあ、僕たち翼があるってのは。

僕たちを横目で見ている、でもツアーリを思ってではないよー
誰かの古いお経の祈りを思ってだ。
瞋を焦がして、
さあ今くぼみをめがけて彗星が飛んでいく

私の星よ、隠すな、隠すな、
その彗星に苛々させられるなよ
ただ何百もの秘密を
夕焼けと朝焼けが取っておいているからね。

僕たちは一枚のジャケットで覆って待っているんだ
人の手の及ばぬ関わりをね
そして槍の一突きで喘いでいるの、
雨の降るのがやたらじゃないとき。

私の星は私のボス、
愛人だ、断頭台にいるときに、
私は知っているぞ、死への激情
のりのついた袖をね。

そしてどうでもいいんだ、そしてどうでもいいんだ、
天国をぴんと張った気持で味わい、
万歳君のワイン、
それが零時半に流れてる。

万歳君のお目々、
君の色は半分悲しい、
万歳真っ暗闇の興奮
幸せだと笑っている、互いの肩越し。

私の星よ、隠すな、隠すな、
僕たちは大騒ぎをした、まるでホテルのようだ、
そしてもし「天国」と書けないなら
私たちにはこんなこと神様が許さないのだ。

1964

なるほど天才だ。というより早熟だ。こういう若き天才たちが集うところは、当然のようにリモーノフは吸い寄せられるのだ。でもそこは彼の言うとおり、望みである。ここから出て、立ち上がれ！というのがいつも心にある。ここではないところには自由があるはずである。つまり永遠に、ここから出て行くことを、自ら言い出し、実行してしまう。誰もが穏やかな暮らしが夢だと思ふのは誤りなのかもしれない。自由こそが文学芸術を目指すものの究極なのだろう。しかしリモーノフは最近ではすっかり文学はやめにしたという。文学は一人でやるもの、ブルジュアのものだと。でもね、詩がいいよ！昔の文学は娯楽、それが映画、テレビに移ってるだろう。昔から自伝的に全てを書くのだ。でもそれは政治、思考、哲学的な書き物であって、それが宣伝にもなるのだろうし、唆しにもなるのだろうし（でも昔と違う小型煽動じゃ

ないよね), 記録ドキュメンタリーという超現代的な文学的活動になるのだろう。こんな詩に若い血潮をかき立てられるというのは, やはりあの時しかないのだろう。若さがなせる技なのだろう。

スモギストの裸足のデモ隊が西ドイツ大使館に抗議, 「死せる文学者」のリストをドアに貼付。リストにはアンドリューシャ・ヴォズネセンスキイやジェーニャ・エフトウシェンコの名前すらあった, と有名人と友達だと言わんばかり, 愛称で呼び, ブルシロフスキイが感動して言ったのだ。

「スモギストたちには彼らはもう老人だよ! 力だ! 若さだ! 燃えさかる火だよ!」こんな風に幾人かが読み解いていたが, 当のスモギストたちはこう解いていた。「天才たちのもっとも若い会会員」, リヨン・グバノフはほんの17歳だぞ! (ここは彼は間違っていた, グバノフはもうその年に20になっていた)。要するに彼は私たちを一心にモスクワに来るように言っていたのだ。私は強く招かれる必要はなかった。私はそこへ行きたかったのだ, ハリコフでは競争相手は誰もいなかった。…若いハリコフっ子リモーノフの詩を聴いて (詩を褒めて), ブルシロフスキイがずっと執拗に私たちに落ち着き払って別れに言った。「モスクワは一筋縄では行かないのだよ」と彼は言った。「だからこそ君達みんなをモスクワへ引きつけるものがあるんだよ。君達にはここに作り上げた仲間があるじゃないか, だからものを書いて, 絵を描きなさいよ, 一集まりなさいよ, いろいろ話し合いなさいよ」。最初は強く招いていたし, 宣伝していた, でもそれから引っ込めたのだ。

明らかに, 私達は彼の言うことに従えず, 1966年初めバフチャニャンとモスクワへ発った。カザルメン横町に部屋を借りたが。一ヶ月しか持たなかった。暮らしが大変でハリコフへ戻った。

1967年に9月30日二度目の逃亡が成功。アンナが住まいをベリャエヴォ・ボゴロヂツキイに見つけてくれた。冬に作家本部の会館でのセミナーに入り込むことができた。最後の最後に (私はそこで本当の乱を起こした,

これについては「暗黒時代の外国人」の一章で読める。) タルコフスキイ(映画監督の父、詩人)のセミナーで自分のいくつかの詩を読めたのである。当然のことであるのだが、セミナーには当時スモギストたちが来ていたのである！特別に来ていたのはリモノフを聴くためであったのか、あるいは偶然のことだったのか、しかしそこに居合わせたのはモローゾフ、ドウボヴェンコ、ミーシン、ヴェリチャンスキイ、スラーヴァ。リヨン、アレニコフ、パホーモフ、それから誰かだった。

1969年詩人は恐ろしいほど若かった。モスクワに出てきてもう二年になる、アンナがハリコフに帰ることになる。アトクリートイ街道の三階館の1階に一部屋借りる。詩人はエドともリモンとも呼ばれていた。美人女性、妻のアンナ・モイセイエヴナ・ルビンシュテインが詩人をリモノフと呼んでいた。

若いのに、直情でまっしぐらに進んでいく詩人は明らかに周りのものに一定の敬意を抱かせた。彼らは彼のことを名字で呼んでいたからである。詩人の基本の仕事は当時は心の内で詩を作る状況をつくること、この状況をとことん瞑想にまで持って行くこと、それぞれの詩の腫れ物がニキビのように破裂するそのときを待つことだった、そして急いで紙の上に吹き出したものを混ぜ返すことだった。当時のこの詩人の活動と敵の銃後へ送り込んだ無線技師の活動と比べることができる。(受信機が党技師の身体に埋め込まれており、彼が世界をほっつき歩いて、怖じ気づき、元気になり、常にそこから伝達報道を捕らえようとするのである)。知らせがくることはしばしばだったが、不規則だった。知らせの間に詩人はワインを飲み、談笑し、友人たちと悪態をついたのだ。

詩人たちが若かったとき(獣女—2003より)

当時二十六歳だった1969年。8月21日両歯茎がますます腫れた。アンナはもう決心してとんでもない半分餓えた生活からのがれて休むことにした。

お手紙

この地の暮らしで
もう自分が全く我慢ならぬとなってしまうときに
そのときこそ僕といると一気に
君は悲しくも僕のことを我慢ならぬと思ったのだ

そして君はおさらばだと悩んで決めたんだ
ほんのちっぽけな僕からね
言ってよ一留まることはできないの？
多分君は留まれるよね？

僕は自分の性格をちょっと直すからね
そして君の前でなってみせるよ
自分の目を細めてね
自分の手で優しくね

そして正直なんだよ、この暮らしの中で言葉がね
僕と君は喧嘩なんかなくていいんだよ
だってこんなに雨ばかり酷く打ち付けてるじゃない
誰かが一人で暮らしているとき

でももし頑として君が去ってしまうのなら
自分の決心を決めてから変えてはダメだよ
そんならもう一度君は戻ってこれるよ
二日ぐらいたってかな、それとも戸口からかな

僕は君を呼ぶことも泣くこともできないよ
僕にさせないのは僕の決まり
でも君がそんなことを感じられないだろうけど
僕は君に心の中で必死にお願いするよ
ねえ留まることはできないかい
たぶん君は留まれるよね

クロボトキンと他の詩作 (1967-1968)

でも彼らはモスクワでもう二年いたのだ。「医者に行きなよ、エド」とアンナが言って、汽車に乗り込んだ。「馬鹿なことをしないようにね！ アンタは伝染病で、菌莖にうつったのよ。こんなことで冗談なんかみんな言わないわよ。行きなさいよ！」

医者には詩人は出かけられなかった。彼のモスクワ住まいは居住登録なしなのだった、したがって無料医療サービスを居住地で利用できない、だができるのはすべての正常なモスクワ住民、その六百万の合法末裔だ。彼は、おそらく、不法末裔百万のうちの一人名なのだ。確かに、個人医を訪ねることができた、でも診療には彼にはお金がかかっただろうに、そんなものは詩人にはなかったのだ。彼はとにかく全力を挙げていて、必要な毎月の三十ルーブルをびっこのボリスに返済するに手に入れていた。食料とアルコールはほんの些細な難題であったが、部屋代は大変な難題だった。公平のために言っておくが、ちょうどこの頃に詩人の両親が、彼の職業とライフ・スタイルに賛成しなかったのに、彼に毎月二十五ルーブル仕送りしだした。両親の犠牲はいつも願ってもない時だったのだ。それを中央郵便局留めで受け取り、詩人はいつも幸せそのものだった。後に感謝せぬ奴こそ忘れてしまうのが彼の詩創り運命でのこの慎ましいがいつもの両親の思いやりである。そしてこれは彼らの意に反して彼が詩人と作家になったんだと言うことになるのだ。

嗚呼、彼の運命に役立った送金、もう言いましたが二十五ルーブルと、父から受け継いだ手仕事ができること、鉋かけ、鋸引き、金属の扱い、独特の形に鋳物をする技能、一詩人が仕立屋になったのは父から受け継いだ習慣のおかげで、母からではないのだ……詩人に伝わったのは、嗚呼、まあちょっとした両親の迷信だ。医者嫌いと言者の言うことを信じないのは迷信の一つだった。「詐欺師だ！」と父親が断言した。「とくに薬の処方だ。決して酷い錠剤は飲むなよ、なあ息子。とんでもない奴の子供らが今日突然、常時は人類が四半世紀用いてきたが誤って処方されてきたと、明かすんだ」。

彼が菌莖をはらせて高熱三十九度二分だったとき、友人のシベリア風の民

家療法を利用，つまり高温の風呂に入り，十五キロを早足で歩くことにしたのだ。

将校の父がいつだったか詩人に伝えたのだが，兵士の教練は完全戦闘装備で歩く速さは毎時六キロだと。したがって二時間半でヴォロシーロフから・アラパーエフまでの・キロだ。十五分でプレオブラジェニエ（主の顕栄）広場まで歩いてから，詩人は当然病んだ汗でセーターとズボンがすぶ濡れになった。ずっと洗濯していないセーターと一緒にたになって，汗は詩人の廻りに酸味がかった不快な臭いとなった。詩人はあたかも腐ったひどい臭いのする雲の中を歩いているかのようであった。しかし彼は現代の詩人，「モード詩人」だった，つまりいまましい，酸味がかった香りに彼は慌てることはなかった，そして自分が本物であることに喜びさえしたのだ。言っておかねばならないが，私たちの詩人は昔の流行りのミモザ・ローズを褒めちぎる物書きではない，彼は喜んで自分の詩の中に言及するのが，プロレタリアの強力消毒オーデコロン，排泄物，埃に汚れ。美しいものより詩人は見せ物でない本物が好きなのだ。

プレオブラジェニエ（主の顕栄）広場では獣のように自動車やトロリーバスのサイレンがほえていた。そしてこのプレオブラジェニエ広場からイズマイロヴォまでの全線の軌道に見えたのは，ジオット以前の中世芸術家の奇妙な見晴らし図そのものだった，一様で，距離と共に二両の路面電車が小さくならなかった。そして音を立てていた。路面電車の先頭車両のそばにものみtainな人間が寝転がっていた，そして大声で泣いていた。女の人だ。片足がまるで刃物で切り裂かれた魚の死骸で，真二つに折れ曲がっていた。詩人が苦しそうに数分間眺めていたのが誰かの人生でその足下で蠅だらけの中でもがいていたのである，そして哀れみや人間らしさのわずかのこみ上げも感じなかった。ただ自分の中に起こっていることを吸い込ませたいと思うことだけで，後に詩作の一つで用いてみたいと思ったのだ。

「いかに詩人たちが若かったか」（獣女2003より）

詩作初期と幼少時代に深く刻み込まれた良き暮らしへのあこがれ

コリカは音楽をやっている、母の受けが良かった。

彼の格好はベージュのアルペンコートで、オーストリア製。コートはフードが付いていた。しかし、嗚呼、手に入れたのは新品ではなかった、モスクワの音楽祭でだ。一気によれよれになってしまった。より良き暮らしを目指して僕とコリカは黄色い家具張り地布を買ったのだ、僕がコリカのコートの寸法取りをして、それを紙に移した（僕はいつも幾何に強かったし十歳から十一歳に小銭を稼いだのも、僕たちのご近所のおばちゃん主婦たちに型紙を描いてあげたからだ）、そしてできた型紙でコリカの住むバラックのマーシャおばさんが僕たちに二着のフード付きのジャンパーを縫ってくれた。このジャンパーを着て僕たちが黄色い鳥のように集落をほっついていた。さらに最高に堅い鉄から僕らの仲間の一人が僕たちに作ってくれたのが四枚の靴用の踵であった。奴は工場の何台かの超硬度サーメットドリルを壊してしまったのだけど、それは踵留め金に十二個の穴を開けてからのことだった。ネジで留め金を踵に締め付けて、僕とコリカは歩き回るのに、足を引きずり、こすってはパッパッと火花の束を立てていた。もし僕たちが仲間でなかったら、僕らを黄色いジャンパーを言いがかりにサルトフカで毎日殴られていただろうな、こんな風にあそこは暗い進歩していない人たちがいた。そこでは長靴を履き、灰色のダブルの制服を、モスクワっ子たちはこう言うのだがね、着ていた、そしてハンチングをかぶっていた。なんとすばらしい黄色いジャンパーなんだ。

これがかっこよさの始まりなのである。

詩の原点であった風景を後に歌う。十五歳のだったから、1959年。これを書いたのは76年から82年の間。（33から39歳の間）ニュー・ヨークーパリのどこの辺りで書いたのであろうか。どこにおいても心の内に見える景色は同じだったのだろうか。

ウクライーナの慎ましい家のただの世界に
この世と思えぬ真っ赤な西日だった
真っ赤な西日の中に当時あったのは
今は生き長らえてきた年月

死んでしまう気がした。そして全く立てなかった
そして僕は十五だった
そしてもし木の幹があるいは建物の隅が
あるいは野バラの茂みが出てきたときには
するとそれは虫けらみたいな片田舎だ
でつまりは暮らしが酷い臭いをたてていた

僕が当時母さんを馬鹿女と言った
父とはわずかな言葉しゃべらなかつた
僕は泥棒だった。体操に馴染んでいた
そしてブロークを読んだ。そしてワインをがぶ飲みだった。

そうだ、歳をとれば基へ戻る、自分の核となったあの記憶へだ。そうだ、
良き暮らしを求めて、ずっと彷徨い続けた。その本はあの記憶。嗚呼、それ
にしてもついていた。時代の子なのだ。帰れぬ者は数知れず。間に合わなかつ
た者は数知れず。帰ろうとしても、帰れない。求めに求めて帰還者になれた
のだ。そうして参照すべき原点に立ち向かえば、いつもあの記憶なのだ。哀
歌じゃあないんだぞ。「そこより出でて、立ち上がれ」。若造などと言わない
でおくれ。

著作集など

- Э. Лимонов Книга мёртвых СПб Либус. Пресс 2001
- Э. Лимонов Унас была великая эпоха СПб Амфора 2002
- Э. Лимонов Подросток Савенко СПб Амфора 2002
- Э. Лимонов Молодой негодяй СПб Амфора 2002
- Э. Лимонов Стихотворения Ультра. Культура Москва 2003
- Э. Лимонов Священные монстры М. АaMarginem 2004.

Э. Лимонов Девочка-Зверь СПб Амфора 2003

Четыре вечера с Владимиром Высоцким: по мотивам телевизионной передачи
/Автор и вдуший З.Розанов М.Искусство 1989

Н.В.Колесова Далалекие понятия для близких отношений (О некоторых
трудностях перевода с итальянского языка) в Журнале “Мир
русского слов”, No.4, 2004

Фасмар Этимологический словарь русского языка ТII. М.1986(2)

資料サイトアドレス

http://nbp-inf.ru/new/lib/lim_biography/2003

Моя политическая биография 2002

<http://www.rvb.ru/np/publication/01text/15/01gubanov.htm>

<http://www.vesti.ru>

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/literature/limonov.html>

<http://www.radiomayak.ru/archive/test?stream=scheludes/70&item=16480>

<http://imperium.lenin.ru/~verbit/Limonov/nns-limonov.html>

<http://imperium.lenin.ru/~verbit/Limonov/kommu-limonov.html>

<http://kreml.org/interview/95759133>

<http://www.newtimes.ru>

<http://www.moscownes.com/interview/2004/08/09/limonov.shtml>

<http://www.exile.ru>

<http://www.sm-plus.ru./russian.shtml>

http://www.gazeta.ru/print/2005/02/01/oa_146851.shtml

<http://magazines.russ/znamiq/2001/1/ivanova-pr.html>

DVD

Русское Пигмалион Продакшн Синемафор Режиссер/Сценарист А.Велединский